

はじめに

これは僕がインドに滞在した九日間の日記になる。初めて訪れたインドは崇高で下品で、最高に野蛮な方法で僕を受け入れた。正確に言うは無理矢理入っていった感覚に近い。

当時の気持ちを出るだけ正確に記したいと思うので内容は殆ど日記の表現をそのまま使用している事を了承してもらいたい。

最後にインドでは毎年多くの観光客が行方不明になっている事を想像してほしい。何故帰って来ないのか？

1 居心地がよくて居着いてしまう。

それもある。

2 ヨガの修行をすることにした。

それもある。

3 拉致されて帰って来れなくなっている。

そう。僕は3番。

ソックスの下に隠したお札も南京錠でロックした財布やパスポートも、体ごと攫われたら意味ないじゃん！！！！

インドから帰ってきた人には笑って読んでもらいたいし、これからインドに行く人には事実として心の隅にでもしまっておいてほしい。きっとあなたの役に立つと思うから。

僕は知る。

何もなくて全てある。

インドは自分の鏡だという事を。

プロローグ

僕が初めてインドに行ったのは12月の初め。旅立つ朝、僕は興奮して眠れず、妙に苛立っていた。

ガールフレンドはまだベットの所で寝息を立てている。彼女の名前はウツシー。僕らは付き合って3年になる。喧嘩もたまにするけど、仲のいい方だと思う。

時間を甘く見ている僕は、いつも待ち合わせに遅れる。僕の友達も遅れるから帳尻が合う。世の中うまく回っているものだと思う。僕は普段そういうダメな付き合いの中で生きているのだけれど、その日も例の如く空港に行く時間ギリギリまでコーヒーを飲んだり、まだ見ぬインドを想ったりする。そしていつものように時間が迫り、急に焦り始める。

寝起きもあってか、彼女と険悪な空気になる。かけ乗った電車の中。一言も口をきかず二人並んで座っている。

彼女が降りる駅で、僕にそっと手渡して言った。

「何かの時に使つてね。」

手のひらには三千円。たかが三千円かもしれないけれど、当時の僕らにとっては大きい金額だったし、彼女がどんな気持ちでそれを手渡してくれたかを考えると胸が痛んだ。車掌は扉を閉め、電車は次の駅へと向かっていく。僕はどんな顔をしていただろう。ありがたいとも言えずに。

空港へ向かう電車で、焦る気持ちと彼女の気持ちで僕の頭はすでにクシヤクシヤになっていた。

今思うとこれが、これから始まる狂想曲のプロローグになっていたのかもしれない。それから10時間。

夜のインドは何も知らない顔をして僕を飲み込んだ。

空港は僕を遠くへ運んでいく

12/3 3:00 a.m.

空港に到着した。今回の僕の目的はバラナシというインドの東側にある町でガンジス川を眺めながら瞑想をする事だった。出来るだけ長い時間をバラナシで過ごしたかったのですが、飛行機で向かおうと思った。朝一番なら飛行機も空いているだろう。出口の前に両替場がある。外貨は全く持っていなかったため両替をする。

2万円位ごまかされた。

空港でごまかされるなんて想像しない。その時はまだ気づいていないのだけれど。ゲートを出ると百人近いタクシীর客引きが僕をやじる。それを横目に僕は航空チケットカウンタ―でお姉さんとチケットの交渉をする。バラナシ行きの飛行機はないみたいだ。たどたどしい英語で申し訳なさそうに謝る。そして言う。

「外のタクシ―に連れて行ってもらったらいいわよ。」

外のタクシ―ってあれか。あの入れ食いみたいなのところか。仕方ない。僕は一刻も早くバラナシに行きたいのだ。思い切って空港を出る。

一足。

既に数十人の客引きが僕の周りにたかる。「where're you going?」
服や体を引っ張る。「oh, fuck! I'm going that way, excuse me!」

勿論行く当てはなかったのだけれど、とりあえず「の客引きたちをどかせたかったので叫ぶ。煙草を吸う。客観的に眺める。

全く勉強して来なかったので、ルピーがいくらか全然分からない。手当り次第にふっかけられた金額から交渉をはじめて相場を知る。最後によし、とこのまともそうなやつに決める。

「空港のチケット売りの人がタクシ―ならチケット売り場分かるって言ってたから。」

「ああ、分かるよ。じゃあとりあえず乗りな。」

一人だと思っていた車に仲間がやってきた。運転席にはそいつと、助手席には彼の友達。そして後部座席に僕。

「はじめまして。僕の名前はアナー。よろしく。」

うさんくさいなあと胸が騒いだが、夜の静寂が僕の気持ちを撫で下ろした。

そして僕はヒマラヤに行く事になる

12/3 3:45 a.m.

タクシーは静かな夜の町を順調に滑っていった。といっても順調かどうかなんて僕には分かるはずもない。車の中で彼らは聞く。

「インドは始めてか？」僕は答える。

「始めてだけどいい所だね。」

まさにネギを背負った鴨。そして僕のポータブルプレイヤーに食いついてきた。これはいくらだ。どうやって使うんだ、等々。なんでこんなに食いついてくるんだろうと、その時は不思議に思った。

車が止まる。月がとても綺麗だったのを覚えている。そこから伸びている枯れ木はアメリカのホラー映画のそれに見える。彼らが促す通りにビルの中に入る。質素な作りの2Kのアパートの一階。彼は言う。

「壁を見てみなよ。」

壁には沢山の日本人からの手紙が張ってある。お礼の手紙だったり、旅行を申し込む手紙だったり、内容は様々だ。僕はそれを一通り目を通して椅子に腰を下ろす。そこから長い交渉が始まる。

「これ吸うか。」

彼は勧める。僕は一口吸って返す。彼は僕の旅券を探しに片っ端から電話をかけてい

る。朝の4時を回っているというのに、インド人はよく働くもんだ。彼がいうには、バラナシは今巡礼の真つ最中だからチケットが全く取れない、と。地図を広げて言う。「ヒマラヤなんてどうかな。今の時期、涼しくて最高だよ。山のほとりでゆっくりするのもいいんじゃないかな。」

想像してみる。

悪くないかも。バラナシが本当に取れないのなら、方向転換もやむを得ないかもな。そう思った。明日から週末。町や交通機関も休みに入るらしい。

金額の交渉に入る。彼が僕のルピーを見て聞く。

「いくら両替した？」

「二万円くらい」僕は答える。

「君、相当ぼったくられてるよ。」

彼は呆れた表情で僕を見たが、僕はそれ以上に僕を呆れた。三時間は交渉していただろうか、朝がやってくる。暑さと睡眠不足で僕の思考は鈍り始める。疲労もピークになる。結局ヒマラヤに行くお金にも僕の手持ちでは足りない事が分かり、持ち金を全て渡し(しまった)ヒマラヤの片道チケットと交換という事になった。残りの交渉は彼らの家でゆっくりしようという事になった。宿も決めていなかったので、僕はそのまま同行する。

アナーも、もう一人の男(日本人の奥さんがいる)もいい奴だと思えけれど気は抜けない。

全財産の七千ルピーと取っておいた二万円。今は彼の手の中に。

文字通り無一文です。いきなり。

優しいあの子に会いたいな

12/3 7:30 a.m.

彼らはそのままダウンタウンに連れて行ってくれた。昔、世界不思議発見で見たのと同じ、赤茶の道と石やセメントで荒く作られた家ばかりだ。路地の奥に向かう。

「おい、飯をくれ」

アナーは言う。裏から初老の親父が出てきて会釈する。僕は奥の座敷に通され、蠅ばかりの机でお茶を飲む。途中声が聞こえる。

「いい客が来たな。」

「まあな。いい客だから大切にしないとな。」

そして二人は卑しく笑う。むき出した初老の男の歯が黄ばんでいて、僕の気持ちを何メートルか沈ませる。

ヒンディー語は全く理解できないのだが、彼らは何を言っているのかは完璧に分かった。僕の不安は的中しているのだろうが、まだ事実として頭が理解しない。したくない。

それから彼らの家へ向かう。

ここがどこかも分からない。見た事のない道を、見た事のない人たちと知らない場所へ進んでいる。

彼は見てみると言っ窓の外を指す。牛が寝ているのかと思ったが、車道の畔には、転々と人の死体がある。かろうじて顔に布が被せてある。それについて何の感想も持たず、僕はただ延々に続く赤茶の車道と人の死骸を流れ過ぎていく。

家に着くと従兄弟だという長身の男と、明らかに用心棒のようなうさん臭いマッチョな男を紹介される。そしてもう一度朝ご飯と一緒に食べた。

あり合わせで簡単な料理を作ってやる。家の中は2DKで、とても広いが至る所に蠅とゴキブリがいて僕の食欲を減退させる。皆よく食べる。

そして居間で皆。今は眠っている。僕は眠れない。

ドキドキして眠れない。

悔しい。

一度だけアナーが電話を貸してくれた。僕は空港でボラれたのが気に食わず日本の保険会社に連絡したのだ。しかしなんだ、この対応！

保険会社「大使館に連絡してください」

僕「いや、今日土曜日なんで休みなんです！」

保険会社「そしたら月曜日まで待ってください」

僕「それがここだけの話、僕捕まっているみたいなんです！ 一円もないんです！」
保険会社「そうですか。そうしましたら、こちらでは対応できないので、月曜日に大使館へ連絡してみてください」

Fuck

電話を切る。鉄格子の玄関から赤茶けた町を眺める。
旅はすごいな。いろんな所に連れてってくれるよな。
これもカルマかな。それにしても旅の一日目は昔からついてないなあ。パリでもスラれたし。まあ、不注意か。
お小遣いをくれた父さんや母さん、おばあちゃんに申し訳なくて、泣きそうに悔しいです。

くやしいな。

ウッシーに会いたいな。

優しいあの子に会いたいな。

彼等が起きたらお金を返してもらって（これではヒマラヤには行けない）デリーの駅へ行こう。

バナナシは巡礼の真つ最中で電車も飛行機も満席だから、マトウラーに行こうかな。シタールを買って川岸で一週間練習するんだ。

落ち込んでなんていられない。

悔やんでなんていられない。

自分で自分の旅を作って強くなってやる。

落ち込んでなんていられない。

ブルーハーツ持ってきてよかったな。

カギはかかっている。二人の男が僕を見張っている。

12/? 1:00 p.m.

目の前にサルがいます。停まったドライブスルー的な所で猿回しが車に猿をのせてお金を請求する。車の中。すごいサービスだな。これにお金は払えないでしょ。

こんな事を書けるなんて。

幸せに思う。

昨日あれから。

彼等が寝ている間、ずっと不安で仕方なかった。嫌な胸騒ぎがずっとしていた。待ち切れず、アナーを起こしてお金を返してほしいと言った。彼は怒ってもうチケットを予約したから無理だと言った。

ヒマラヤに行くにはお金が足りなかったにもかかわらず！ ヒマラヤのチケットは片道切符だったので、僕は帰って来れないともう一度伝えた。彼はヒマラヤからバスが出ているからそれを使えばいいと言う。僕は無茶言うなと言った。彼はお金がなくなれば何か売ればいいと言った。この時計とか。

この時計！！！！

父さんに入学祝いにもらった時計を売れる訳ないじゃないか。言いたくなかったし、我慢していた最後の言葉を言った。

「じゃあ警察に言うわ。」

彼の目の色が変わった。

今でも覚えている。

あの褐色の目。

彼は興奮し、ものすごい怒りだし、ありつたけの力で僕の肩を押し、立ち上がる僕を無理矢理座らせる。まるで肉食動物が獲物を狩るように。

僕はだんだん腹が立ってきたので、まくしたてた。

僕らの言い合いはエスカレートして言ったが、それよりも、周りがずっと黙って見つめていた事の方が、僕には気持ち悪く思えた。

僕も興奮していたけれど、頭の中ではここから逃げ出す方法を考えていた。

カギはかかっている。

二人の男が僕を見張っている。

グッドジャパニーズ

どうすればいいのか考えた。今は静かにしておいた方がいいな。チャンスを狙おう。

彼は言った。

「君はgood japaneseじゃない。」

good japaneseって日本人だ??

言いなりになって「NO」が言えずに従う日本人の事か??

何だそりゃ。

俺はgood japaneseじゃない。

俺はchickenじゃない。

俺は大切なひとや大切なものや、守りたいものがあるんだ!!!

この旅を成功させなきゃ。

これから旅する日本人の為にも。

こんなことは許さない。

振り向くな。後ろには何も無い

5:00 p.m.

チャンスが来た。

僕というビックゲストが来たから今夜は盛大にパーティをするとアナーが言い出した。買い物をしてくると一人が言った。主犯の方。俺も行きたい、と言った。

ここは暗くて。頭がおかしくなりそうだ。

光が見たい。

彼は渋々「OK」したが、バックは置いて行けと言った。僕は「NO」断固として「NO」と言った。誰が大切なリュックを離すか。中には鞆の裏に取っておいた一万円が入っている。あまりに僕が断るから、
「中には何が入っているんだ、開けてみる。」と彼は言った。

僕は「NO」と言った。

that's not , my friend.

友達は絶対にそんな事言わない。

二人で町を歩いた。

逃げ出すチャンスはいくらでもあった。でも今じゃない。すれ違うインド人がちらちらと僕を見る。二人で酒屋に入る。ビールをケースで買った。俺の金かなあ。チャンスはあった。

でも、まだだ。

その後リクシャー（運転手付きの自転車。三人乗り）に乗ってマトン（羊の肉）を買いに行く。どうやら俺が料理するらしい。

絶対しねえ。

運転手も彼等の仲間らしく、彼が肉を買っている間もその運転手は僕を見張っていた。まだだ。

通りすがりのリクシャーにヨーロッパの女の子が乗っていて、彼女はとても楽しそうに見えた。

買い物が一通り終わって家の前まで来た。

運転手は前を向いている。

リクシャーは反対方向を向いている。

彼はビールと肉を持って階段を上り始めた。

今だ!!!!!!!!!!!!!!

僕は震える体と心を何とか一つにまとめ、力一杯走り出した。

振り向くな。

後ろには何も無い。

僕には他にあげられるものがない

走った。思いつ切り。久しぶりにすごい走った。

暗い所はもう嫌だった。

目眩のするような暑さの中、知らない町を闇雲に走る。

左目に男の子（15歳位）と女の子二人（共に7歳位）の三人組が入る。目が優しかった。

「助けてくれ。今逃げてきて追われているんだ。」

事情を簡単に話すと、男の子はとても紳士な対応で

「上に隠れてな。」

と言ってくれた。女の子たちは突然のハプニングできやあきやあ言っている。きやあきやあじゃねーっつーの!!!マジで!!!!

息が上がる体を壁に立てかけるよううなだれる。目を瞑る。鼓動が聞こえる。振り返る余裕なんてない。頭を整理する余裕なんてない。考えられるのは今だけ。今ここにいる事実だけ。

二階から外を覗くと、若者たちが騒がしく何かを探している。俺かな。

そうだよ俺だよな。

通りを絶え間なく捜索隊が行き交う。

ここにも何人かが来て僕の所在を問う。

でも、その男の子はNOと言ってくれて!!!!

彼等が去った事を伝えるに二階へ上がり、僕に水をくれた。

それはとても冷たく、甘く、僕を現実へ戻す。

スパイ映画かよ、本当。

まあ、今だから書けるけど。

隠れていた間、追っ手の人数は瞬く間に増え（2〜30人はいた）人は、何人ものインド人がヘアバンドをした日本人を捜しに来た。その後、警察を呼んでくれと言った

が、警察は無理だと彼は言った。良く解らなかつたけれど、すぐに理解できた。世の中にはそういう町もあるんだ。

その男の子は警察の代わりにリクシャーをつかまえてくれた。

お礼に僕の黒いマフラーを貰ってくれと言って渡した。

僕には他にあげられるものなんてないから。

一生縁のないと思った言葉を僕は心から叫ぶ

周りを気にしながら、素早くリクシャーに滑り込んだ。アスファルトは暑さでゆらゆらと歪んで見える。

「とにかくここからどこかへ行ってくれ！」

と運転手に言った。後で警察に行つて金を取り返してもらおうと思つたから。早く行つてくれ！！周りがちらちらと僕を見始める。出発した瞬間。

とうか出発しない。何故だ??

後ろを見る。

10歳位の男の子が鼻を膨らませて僕のリュックを引っ張っている。すごい剣幕で、すごい力で、リュックを離さない。

「burglar (泥棒) ……」

いやいや(笑)

「携帯泥棒ー！！！！！」

いやいや（苦笑）

俺はなにもとつてねーつーの！！！！！！！！！！（怒）

しょうがないから応戦ですよ。

10歳の男の子とのリュックの取り合い。端からみたら滑稽だっただろうな。必死で離そうとするが無理。

無理。

time up

仕方がないね。最終手段だ。

「HELP ME-----.....!!!!!!」

「SOMEBODY HELP ME-----.....!!!!!!」

何回も何回も言いましたよ、ええ、はい。

ものすごい人が集まって来た。道は人ばかりが出来、道路を囲む4階建てのマンションの窓から沢山の野次馬が眺めているのが見える。さしずめストリートファイターofバックみたいだ。すると前の家から何か偉そうな人が出てきた。髭面の70歳位のおじいさん。

ヒンディー語でその少年に何か話しかけ、その少年をリュックから離した。彼はまだ俺が携帯を盗んだと主張している。誰が携帯なんか盗むかっつーの！！！！！！！！！！普通に考えれば解るのになあ。

その偉そうな老人は（名前はババ ママという）彼はまだここにいるから大丈夫だと男の子に行つて彼を帰した。

そして「trust me」と言った。

僕は黒いマフラーを巻き直す

誰も信用出来なかった。ここはマファイアタウンじゃないかと思った。彼（ババ ママ）は一通り話を聞いて、俺が落ち着いたのを見ると

「よし。家を案内してくれ」

えーっ!?

無理。戻んの???あそこに????

また会うの? 彼等に????

無理無理無理無理無理。

trust me. I'm with you.

よし。これが最後だと思った。信用するの。

警察を呼んでくれと言ったら、

「警察の方がひどい街だつてあるんだ。この街の警察はクソだから。わかるかい?」
と言った。話をしていると、リュックを取り合つた10歳の男の子も戻ってきた。ババママに何か耳打ちをする。

僕、ババママ、もう一人中年の男とリュックの男の子。

それを先頭に増えに増えた野次馬達がぞろぞろと後ろを着いて歩く。

軽く50人はいるだろう。聖者の行進のようだ。

家に着いた。家 なんて言いたくないな。その部屋に着いた。アナーではなく、もう一人のインド人がその部屋にいた。

「降りて来てくれ」

ババママは言った。

そいつ（日本人の奥さんがいる方）は「ジヨニー、部屋へ戻ろう。」と言った。ババママに対して自分たちは白だと言う事をアピールしているように見えた。

もちろん「NO」

信じてたのに と言うしかない。

ババママとそいつが話をしている間にもう一人がリクシャーで帰ってきた。どうやら

僕を捜しに行っていたようだ。目が怒りに満ちている。何故こんな事になっているのか、と語りかけているようだった。

知らねーよ。お前が悪いんだろ！

こちら側が50人。向こう側に50人。全ての窓にまた50人。その真ん中に僕らがいる。周りが僕らを囲むように立ち尽くす。city of godみたいだ。そしてババママ。彼はどうやら本当に味方だったようだ。ヒンディー語なので何をいつているのか解らないが、声を張って言い合いをしてきている。最初に僕を匿ってくれた好青年も駆けつけてくれた。首には黒いマフラーをしている。そして、アナーが何かを言った瞬間。ババママが

アナーを殴った！！！！

一瞬野次馬が騒がしくなる。怒声が飛び交う。子供の喧嘩に親が出てくんない！！とかそういう事。

「部屋に入って四人で話をしよう。ここは人が多すぎる」

ババママが言った。二度と戻りたくなかった部屋にもう一度入り、話をする。ババママの話だと、アナーはヒマラヤのチケットは本当に取っていたらしく、キャンセル料を除いた全てを俺に返すという。承諾しない理由はなかった。アナーはチケットから日本円の二万円と七千ルピーを出して俺に手渡す。相手が目を逸らすまで絶対に目をそらすもんかと思った。

話が終わって、ババママが先に部屋を出て、俺とアナーともう一人の奴の三人になった。何て言おうか考えたけど、沈黙の後には

「thank you」

という言葉しか出て来なかった。

なんでだろうな。
騙されたのに。
サンキューだ。

もしかしたらどこかで感謝してるのかもな。
人なんて簡単に憎めない。

外に出た僕に、優しい少年がマフラーを申し訳なさそうに差し出した。

O K

ここはアウエーだ。

優しくしてくれたのに迷惑かけてごめんな。

僕は黒いマフラーを巻き直した。

それはとても甘くて優しくくて

ババママは彼の家に招待してくれた。入ると空気が暖かった。彼は建築家で、今は小さな息子と娘の為に部屋を作っている真っ最中だった。エメラルドグリーンと水色、そしてまだ色の着いてない大きな丸いドア。かわいい部屋。とても素敵な部屋。奥さんがチャイイを出してくれた。それはとても甘くて優しくくて。

涙がこぼれた。

泣くつもりなんてこれっぽっちもなかったのに。

「oh, don't cry boy」

初老の奥さんが抱きしめてくれる。柔らかな肌に触れた。女性はいつだって男性を包み込む、そんな大きな存在。男なんて、いつまでたっても子供のままだ。

僕はなんて小さいんだと思った。

始めてインドの暖かさに触れる事が出来た気がした。
嬉しかったんだろうな。

のどを伝って、肌を伝って、

その瞬間は優しさになって僕の体の芯までしみ込んだ。

幸せなら手を叩こう

12/4 6:00 p.m.

僕が落ち着いたのを見計らってから、ババママは彼の友人を紹介してくれた。名前は John(ジョン)。声が高い。マイケルジャクソンみたいだ。彼は政府の役人だという。

「government officer」って言ったと思う。

ババママは彼の家に泊まってもいいし、ジョンの家に泊まってもいいと言った。彼は信用できるし、何かあったら俺が彼を殴るから、と言った。彼嬉しかった。

結局ジョンの家に泊まる事に。

リクシャーで5分の所に彼の家はあった。一応用心の為、彼が飲み物を買いに席を外した隙にリクシャーの男の子に聞いた。 「彼

はいい奴かい？」男の子は少し考えて首を横に傾げた。

その意味が理解できるのはもっと先の話になるのだけれど。彼は信用できない奴なのか、それとも僕の言っている英語が通じなかったのか。そのときの僕は信じるしかなく、多少の不安を胸に、彼の後を降りた。

ジョンはおじいさんともう一人、サトツシユというインドの青年と一緒に暮らしていた。彼は来年日本人の女の子と結婚するそうだ。(また!!!) 写真を嬉しそうに僕に見せてくれた。彼が住んでいるアパートはとても広く、明るく、立派だった。

夜になると少しずつ人が集まってきて、最後は15人位のにぎやかな夕食になった。僕は始めて手でカレーを食べた。皆明るくていい奴だ。

5階から窓の外を眺める。小さな路地が沢山あって、それが無数に続いている。空を眺める。暮れかけていく広い空に、僕は始めて自由を感じる。星が近い。

沢山の人が集まって道々で演奏をしている。通りは人でごった返している。その喧噪に熱気が帯びているのが解る。インドでは結婚式の夜には皆で音を奏でるそうだ。

とても大きな音。

生命の音。

その音がずっと続けばいいなと思った。

永遠に続きそうなその音を、横に座ったおじいさんと一緒に、僕はずっとベランダで眺めていた。本当に、この瞬間が終わらなければいいと思った。

音楽が止んだ。

何でもいつかは止まる。

生きているうちは自分がここにいる事を叫びたい。

幸せなら 手を叩こう だ。

ギャング達の寝静まる夜、僕は街を徘徊する

祭りが終わった後、ジョンに連れられて、彼等のアパートの屋上に向かった。彼の友人が暮らしているという。部屋のドアをノックすると、気難しそうな青年が顔を出

した。部屋はワンルーム。奥さんと5歳、1歳の子供、家族4人で暮らしている。僕の事情を手短にジョーンが話してくれて、僕はそれを解りやすく伝えた。彼は本気で悩んで、怒ってくれているようにも見えた。

子供が彼の膝に乗って来る。

彼の目が澄んでいくのが解る。風通しのいい広い屋上のベランダでビールを飲んだ後、僕らは部屋に戻った。

12/5 0:00 a.m.

ジョーンの同居人、サトツシユとこっそり部屋を出る。彼が誘ってくれたのだが、僕も夜の街が見たかった。

明日にはここではないどこかに行くと思うと、この街が愛おしく思えた。出来るだけ沢山の顔を知りたかった。ここはニューデリー。明日はまだ決まっていない、知らない街へ行く。

夜は空気が冷たい。夜中の0時なので人通りは少ない。東京のように夜中まで馬鹿騒ぎしている奴らはいない。僕は始めて歩く街に開放感を覚え、一方で今日のギャング達がうろついているんじゃないかと心配になる。

何しろ僕が捕らえられていた場所から500メートルも離れていないのだから。

「大丈夫。もし奴らが来たら俺が蹴り飛ばしてやるよ」

そう言っただけのまねをする僕よりも小柄な彼を、僕はとても愛らしく感じた。

僕らは小さな公園をぐるぐると回った。そしていろんな話をした。主にサトツシユの結婚話のだけれど。本当にぐるぐると何度も何度も回ったので、自分がハムスターになったんじゃないかと思いきや違う程だった。まだそんなに沢山のインドの人とは会っていないけど、男性は皆とても男性的で、それはやはり生活の為、家族を養う為にそうならざるを得ない環境なんだと思った。

日本みたいにチャラチャラしてる奴はまだ見ていない。守るものがあると男は男の顔になる。

48時間は寝ていない。

眠気は突然やってきて僕をさらっていく。
この日始めて僕は少しだけ睡眠を取る事が出来た。
短い、微熱の様な、興奮と安心の熱を帯びた眠り。
夜が明けるまで。

この暖かい床で少しだけ。

今は何もわからないけれど

12/5 9:00 a.m.

朝起きてジョーンに連れられてデリーの駅へ向かう。
初めて見るインドの街はのっぺりとした印象で、からっとした太陽と車のクラクションがやけに耳についた。
所かまわず皆さんクラクションを鳴らされます。
進行車線から対向車が何台も来たのはさすがにびっくりしたけれど。

連れて来られたのはtravel office。
また！！と思っただけどジョーンを信用した。
店の入るとお決まりの鋭い視線が一瞬僕をかすめる。
僕は騙されないように、慎重に話を進めていく。

結果。

確かに高かったケド

持ち金全部なくなったケド（また！？）

ジョーンに借金したけど（二万円も！！！！）

どうにかバラナシに行く事が決まった。

今回は鞆に隠してあったお金も全部出してしまった。安心してこわい。ジョーンは、今はお金じゃなくて安心を選べと言った。半信半疑で聞いていた。

大丈夫かジョニー。

また騙されたんじゃないのか！？

インドの人が怖かった。

むこうはそれが解っていてふっかけてきたのかもな。

それでも今は一刻も早くデリーを離れたかった。バラナシに向かいたかった。勢いで決めてしまったけれど、それでいいと思う。

騙されてたって構わない。

それも自分の選択だ。

チケットが決まって車を待つ間、ジョーンと二人でカフェに入った。

僕はシタールが欲しかった。

でも、シタールを買うお金がなかったの、ジョーンに話して僕のデジカメと二千ルピーを交換してもらおう。ジョーンはお前がそれでいいのなら、と現金を僕に渡した。これで僕の旅を記録するものは二つの目と耳だけになった。

この旅の金額が高かったのか安かったのか、今（12/5 pm10:35）は分からない。でも見ず知らずの僕にお金を貸してくれたジョーンに感謝したい。

疑ったらきりが無い。

僕は、信じたいのだ。

一瞬の夢

11:00 a.m.

まずはアーグラールに行く事になる。アーグラールまではツアーで手配されてた車で移動する事になる。

アーグラールにはタージマハルがあるのだ。

ドライバーの名前はsuraj(スラジ)

21歳の若者で奥さんも娘もいる。彼と話しているうちに僕は少しずつ落ち着いてきた。彼の目は大きく、顔立ちがはっきりしている。

他のインド人と同じように鷹色の瞳は意思の強さを僕に感じさせた。

途中のドライブイン(といっても通りに小さな屋台があるだけなのだが)でカレーを食べる。蠅がたかりまくった辛いカレーを僕は黙々と口にする。正直味の感想は何もない。自由になれた実感が少しずつ湧いてきて、軽い脱力が体を巡る。味も景色も良く解らない。

安心を得た虚脱感。

僕はようやく自由だ。

5:00 P.m.

アーグラールに着いた。

アーグラールの夜は危ないらしい。この間も一人で旅行に来た日本人の男が行方不明になっている、と教えられる。

外出する時は呼んでくれとの事。

びびって外に出れず。

弱いなあ。

ホテルは超豪華。

狭い部屋の中で僕はこれまでの事を少しずつ思い出しながらこれを書いている。

外の太陽を僕は羨む。
小さな部屋の中で。
時計がコチコチと耳につく。

こんな旅はしたくないのになあ。
またもや窮屈を感じる。

自由を探しに来たのに。

ツアーなんてまっぴらだ。

管理されるなんてまっぴらだ。

夜汽車で「」を発つ前に

12/6 9:00 a.m.

インド最大の建物、タージマハルへ行く。現地まではスラジが車で案内してくれる。僕の靴をとでも褒めてくれる。こんな靴なんてどこにでもあるのに。インドの人たちは誰かが持っているものに敏感に反応する。純粹というか、本能的というか。たまにドキッとする。

インドの観光地はとにかくすごい。車に着いたとたん入れ食い状態で、20人くらいの老人や子供、女の人が群がって来る。案内、客引き、リクシャー、押し売り、皆生きるのに必死だ。

スラジはタージマハルの前まで着いてきてくれた。
入り口のチケットを交渉するが、どうやら定価でしか入れてくれない。（というか、人を見てぼったくっているようにも見える）

失礼なんだけど、この時点では僕はタージマハルにはそんなに興味がなかった。そんなことよりも、観光よりも、もつと現地にとけ込んで生活したかった。少なくとも、タージマハルに入ると、僕は初めてこの地で一人になれる。そう思うと入らない理由はなかった。

タージマハルに入ると自由を感じた。

一人で行動できる事。

誰にも束縛されない事。

素敵な事。

こうやって生きていきたいな。

一人になった僕はまず、この国で生き抜く手がかりを探した。なんせ今現在、1ルピーが何円かも把握していないのだ。正確に言うところはどこかも分からない。まずは誰か信用できそうな人を捜さなければ。僕の状況を話したら、誰か力になってくれたりするかな。

しばらくすると日本人を発見!!! 21歳の男の子。名前はもんた。

一人旅をしている。彼と話していて自分がリラックスしているのを感じた。同一民族意識は意外と強いんだな。

とにかく僕はだれかと話がしたかった。そんな事は初めてだ。

聞くと彼もやはりツーリズムにかかり、高額なツアーで無理矢理現地を廻っていると。やはり一人で歩きたかったらしい。

「でも仕方ないですよ。もつと酷いひとたちだっているんだから。僕はこれを楽しもうと思います。」

そう言う彼の顔は少し寂しそうに見えた。

二人で河が流れるのを眺めながら時間が許す限り話をした。

恋人の話。旅の話。インドの話。感覚も近くて、いい友達になれると思った。

彼も明日の夜行列車でバラナシに行くという。

偶然!!!!!!

弟の直紀と同じ大学で同じ日吉に住んでいるという。

偶然！！！！

明日の12時
バラナシの時計台で待ち合わせをする約束をして、お互いの無事を祈って別れた。
ロマンチックだなあ。

バラナシに行く夜行列車は一便しかない。
つまり今夜列車に乗る時にもう一度彼に会えるかもしれない。

いや、会わなくてはならない。

僕も今夜必ずこの街を発つ

僕にはまだあげられるものが残っていた

タージマハルを見た後、僕はスラジの車に乗って決められた観光地を、決められたtax free shopを巡らされる。

「こんな所行きたくない。」
と言うと、決まっている事だから。守らないとボスに怒られるから、と何かしら理由を付けてかわされる。シルクのカーペット屋に連れて行かれる。

「お前、俺話したよな。お前の所の会社にこの旅行で全財産払ったから、お金ないって」

彼は言う。

「大丈夫。店に入って見て来るだけでいいから。」
なんだそりゃ。

「店員が来たら間違っても見てるだけ、って言ったら駄目だよ。よし。いってらっしゃい！」

なんだそりゃ。

しぶしぶ店の中に入る。
所狭しとカーペットが置いてある間から店員が近付いて来る。

「can I help you, sir」

「that's all right. I'm just looking」

あ、言っちゃった。

店員の顔色が変わる。

「get out」

あゝあ。追い出されちゃった。
入って30秒。僕は苦笑い。

入り口に追い出された僕を、スラジは車の中から見ていた。あからさまに驚きと落胆の顔をしている。ざまーみる。
俺は行きたくない所には行きたくないの……！！

その後、ようやくシタールのお店へ連れて行ってもらった。
しかしジョーンが言っていた金額の10倍はする値段で売られている。僕は不安にな
ってジョーンに電話をする。

「ジョーンが言った値段でシタールなんて売ってないじゃないか！」
僕は少し怒気を含んだ口調で話す。

「大丈夫。バラナシに行けば手に入るよ。」
彼は言う。

このめちゃくちゃなインドで、彼の言葉には説得力が全くなかった。10倍の値段が
相場だとしたら、僕がデジカメと交換したこのお金は無いに等しいんじゃないか。
「分かったよ。ありがとう。」

僕は絶望的な気持ちで電話を切る。
相場の10分の1のシタールなんてあるわけじゃないじゃないか。
それでも僕は信じるしかない。

夜が近付いて来る。

スラジは僕を連れて夜行列車が出る駅まで連れて行ってくれる。なんだかんだで親切にしてくれた彼に僕は払えるチップがなかった。ごめん、払えるチップがないんだ、という僕に、彼は

「いいんだよ、君が無事なら」

と言ってくれた。

彼は仕事で僕という。

家族がいる。

割の悪い客にあたってごめん。と思った。彼に何かしてあげたいと思った。

僕は僕の靴を彼の靴と交換した。

僕にはまだあげられるものが残っていた。

信じるのは自分だけ。それと私はこの人と

12/6 4:00 p.m.

インドは世界のゲットーだ。本当に酷い。駅で電車を待っている間も。何百の目が僕を見ていた。主にヨーロッパの先進国といわれる所にしかいなかった僕は、改めて世界の広さを知る。妬み、冷やかし、好奇心、嫌悪。沢山の感情が僕を通り過ぎていくのが分かる。通過する列車からは、列車が走っているのに駅に飛び降りる人が殆どだし、プラットフォームにはモーターバイクや自転車や、牛がひっきりなしに通っている。

駅の中なのに!!!

トイレを聞いたら駅員は無愛想に

ここだ

と言った。

プラットフォームの真ん中。
そういうことかと、おしっこをした。
すごいな、インド。
隣で老夫婦がお菓子を分け合っている。
いいな。幸せそうだな。素敵な光景。

ウツシーに会いたくなってきたな。

列車を待つ間、日本人とカナダ人のカップルに会った。
マイクとヨウコ。

二人も今夜の列車でバラナシに行く。新婚旅行でインド、ネパールを縦断している所だという。

三人でいると心強かった。

二人は僕の話を中心に聞いてくれて、親身になってアドバイスをしてくれた。
時折真剣になって怒ってくれるマイクとヨウコに、僕は心からありがとうと言いたかった。

ヨウコの最後のアドバイス

「いい、ここでは誰も信じない事よ。信じるのは自分だけ。それと私はこの人と。」

僕はあなたのことも信じたいですと言いたかった。
でもそれは言葉にならずに消えていった。
自分がどれだけ弱いかを知った。小さいかを知った。

もらったチョコレートがとても甘かった。

ずっとチョコレートを食べたかったんだ。

列車消灯。

おやすみ。

それでいい

12/7 8:00 a.m.

列車が遅れている。というか止まっている。バナナシに着くのは10時30分位らしい。その間に頭の中を整理しよう。

少しづつ感じていた事。

インドに来て何かを得ようとしていた。でも現実とは逆だ。

僕はもう、シタールを買うお金と、1日2食、バナナを食べるお金しかない。あとは恋人にささやかなプレゼントを買うだけのお金を残したい。

それだけでいい。

もしかしたらシタールも買えないかもしれない。

それでもいい。そうなんだ。どうせ最初は買えればいい位に思っていたものだ。

少しづつ気付いた事。状況がどうあれ、これは何かを得る旅じゃなく、何もかも捨てる旅だと言う事。

デジカメもシタールのお金と交換した。

靴もスラジのものと交換した。

衣服は最初捕まった所に殆ど置いてきた。

かばんの中はシャツ1枚とパンツ1枚と音楽。

それと時計。

それだけ。

いつのまにかシタールが一番の目的になっていた。なんでだろう？

目的がないと旅がつまらないからか。そんな事ないよなあ。

運命は向かって来るもの。それを切り開くもの。

もう焦ったりしない。

ガンディー（ガンジス河）で沐浴出来れば。

揺れない心で沐浴出来れば。

それでいい。

シタールを買う運命ならばきつと向こうからひよっこり現れるだろう。

決まっていた旅。

切り開いた旅。

心から楽しもう。

気がつくと列車は動き始めていた。

バナナとビスケット

12/7 9:00 p.m.

ありえん位の豪華な部屋でこれを書いている。
広さは畳でいうと30畳は軽くあるだろう。

フロントに掛け合う。60歳位のおじさんが yes, sir と言う。

僕「こんな部屋いらないからもっと安い部屋に変えて下さい！お金ないんです！」
フロント「わかりました、聞いてみます。」

電話する。

15秒

「えー、はい、はい、イエス、イエス。分かりました。はい。イエス。了解しました」
フロント「えー、無理です。」

僕「えーっ！！！！！！」

お前聞いてへんやんかあ！！！！！！

もういいや。面倒くさい。その無駄にでかい部屋に無駄に豪華なベット。天井にはよく見る、くるくる回るでかい扇風機があり、最新型のテレビがある。ドアを開くと広い浴槽があり、その大きな窓からは街の景色が眺められる。いや、ありえんわー。食べているのはバナナとビスケットなのに。

シャワーを浴びる。
シャンプーなんてないから備え付けの石けんで洗う。
シャワーがもげる。しかも水しか出ない。フロントを呼ぶ。

「おい、フロント、お前の所のシャワーはもげる上に水しか出ないじゃないか。おまけに蛇口がもげるじゃないか」

「えー、昨日は出てたんすけどねえ。」手にはシャワーの蛇口。
無理矢理シャワーを埋め付ける所を見て了解。
オーケー、水でいいや。

風格があると言えば聞こえはいいが、ここはべらぼうに広く、ゴージャスでボロい三ツ星ホテル。

welcome to ホーンテッドマンション。

yeah!!!

あの夜。

同じ列車のはずのもんたは駅に現れなかった。
僕は最後まで待ち続けた。

インドの空はとても高く、安っぽい駅のプラットフォームにパラパラと人が立っている。街頭の光が人の息を照らし、それがそれぞれの期待や不安を描きだしているように見えた。その光景は僕に銀河鉄道の夜を思い出させた。

息は白い。

スラジが無理矢理頼んだ初老のポーターが（何かあると彼の責任になってしまうの

で)訝しげな顔をして僕をせかす。

「hurry up, sir, you're gonna be late!」

分かっているよ。

でも待たずにはいられないじゃない。彼が明日の朝バナナシに行くならば、この列車以外にはありえないのだから。ポーターに促され僕は陸橋を渡る。

黒くてでかい列車が汽笛をならして駅へ着く。到着の時刻はゆうに2時間は遅れている。

街頭の下、僕はタバコを一本吸う。味はしない。

駅が、人が、まるで有機質の細胞のようにけたたましく動き始める。胸が高鳴る。

停車時間は1分。

それだけ。

僕は列車に飛び乗った。

出発が遅れた列車は結局到着も遅れ、午後1時過ぎにバナナシに着いた。待ち合わせは12時にバナナシの時計台。昨日二人で地図をみて決めた。それ以外は何も決めていない。明日もう一度12時に時計台へいってみよう。

もしも会えなかったら、大学に連絡して彼の安否を確認したいな。

もんだ君。2年生。一年留年。日吉に住んでいて眼鏡をかけている。

これならなんとかわかるだろう。

僕はなんとかあの街から抜け出た。

この広いホテルで

バナナとビスケットを食べている。

人によさしく

12/7 12:00 p.m.

少し遡る。

バラナシに向かう電車の中。

昨夜

列車の中でおじさんが

「母の体の具合が悪くて、ここを譲ってもらえないか」と言ってきた。

席はぎゅうぎゅう詰め。僕は何とか勝ち取った席にようやく体を伏せた所だった。何度もインド人に同じ事を言われているので「またかよ」と思って、

「ごめん、無理だ」と愛想なく言った。顔すら見ていない。

実際は疲労と緊張による微熱で体が動かなかった。僕は放っておいて欲しかった。人との摩擦が連続的に続くと、人はつかれてしまう。それをエネルギーに変えて行ければいいのだけれど。

僕はそのまま深い眠りに落ちた。

朝

遅れている電車の中で本を読んでいる。おなかもすいていた。何か食べたかった。でもお金がないのでたまに来る売り子のチャイをずっと我慢していた。

「こつちに来ないか」

一人のおじさんが声をかけてくれた。家族もいたので悪い人じゃないと思い、横に座った。

「君もチャイを飲まないか」

彼は勧めてくれた。

お金がなかったから素直に伝えた。

「大丈夫。俺がもつよ。」

と彼は優しく言った。

昨日からにぎやかだった僕の席の周りは全部彼の親戚だった。名前はラーマン。ネパールの人だ。チャーイを飲んで涙が出た。

彼の家族は皆とても素敵でチャーミングで。一人ずつ紹介してくれた。全員で21人……！

僕らは沢山の話をした。

見ず知らずの僕を家族みたいに接してくれた。

国とか肌の色とか年齢とか、本当に関係ないんだ。

暖かくてとても安らかな気持ちだったけど、ふと思いつ出した。

「昨日もしかして、ベッドの事で僕に声をかけたのはあなたですか？」

「うん、でも君も疲れていたし、その話を聞いたら（捕まった話）それは仕方ないよ」

また泣いてしまった。

旅すると涙もろくなるのかな。

自分が恥ずかしくなかった。なんで人は人に優しくできるんだろう。

僕が彼なら、そんな人にまで紅茶をご馳走しないかもしれない。

また一つ優しさに触れて。

本当に素敵な家族だった。

幸せを分けてもらった気がした。

言葉にすれば真実は手のひらから滑り落ちてしまうけれど。

今感じた事を僕は、僕の言葉で繋いでおきたい。

僕は夢中で

神様からの授かり物を手のひらに受け止め続ける。

自分で行くんだ

12/7 7:00 p.m.

昨日は寝ちゃったからな。
今日は2日分書かなきゃな。

バラナシに着いた。
駅に着いたら迎えが待っていた。僕は少し身構える。

ラーマンは、
「もし君が良ければ、僕等と一緒に来てもいいんだよ。」
とさえ言ってくれた。素直に嬉しかった。でも、一人で過ごしたい気持ちが勝った。
笑顔でありがとうと言って抱き合つて別れた。
優しい気持ちになれた。

着いたらすぐにバラナシの支店みたいな所に連れて行かれた。
いつか映画で見た古い長屋の上にあるアリの巣みたいな部屋だった。
僕は最低限の会話でこれからの交渉を進めた。

僕は一人でいたい事。

お金をもっていない日本人だと言う事。

僕があなたたちをまだ完全に信用していませんよ、と言う事を言葉の端々に忍ばせて。
彼は不思議そうな顔をして頷いた。そしてホテルまでのリクシャーを手配した。
バックの料金に含まれているからこれは乗ってくれとの申し出だった。ぼったくりはないなと思い、乗った。

ホテルまでは相当の距離があるらしい。
リクシャー越しに見える人たちは今までよりも生活の匂いがして見えた。

ホテルがあり得ないくらいでかい。

立地もいかにも金持ちの別荘的な場所だ。ヤシの木すら生えている。

「DE PARIS」部屋もあり得ないくらいでかい。三ツ星ホテルだって。
でもごはんはバナナとビスケットなんだけど(笑)

ホテルに着いて、タクシーとか案内とか、色々申し出てくれたんだけど全部断った。

自分で。歩いて。

自分で。見るんだ。

ガンガー（ガンシス河）に行こうと思った。
ガンガーまでは10 kmらしい。
無理すんな、と何回も止められた。

もう無理。

自分で。

行くんだ。

歩いて歩いて歩いて歩いて歩いて歩いた。
初めて自由を感じた。
インド人も、もう怖くなかった。客引きも、笑顔で断れる。
今までは触ったら殺すぞ、位の目で追い返していたからな。

何より僕には音楽がある。
ヘッドフォンから流れるエリックドルフィーの「Fire waltz」は僕を街の景色に溶け込ませる。

空気がおいしかった。
実際にはちりとほこりと、牛のうんこのに匂いなんだけれど。

野球選手は勝利の美酒に酔い、僕はちりとほこりと牛のうんこに酔う。
まあ、そんなもんか。それでもいいや。

僕はようやく一人で歩き出した。

目の前には無限の自由がある。

ガンガーに行く途中で小道に迷い込んだ。

迷い込んだというか、どこも小道なので自分が全くどこを歩いているのか分からない。鉄道のトンネルが低い。熱気と喧噪が横殴りに僕を通り過ぎる。

横を見るとオルガンを丁寧な磨いている人がいた。

吸い込まれた。

楽器を丁寧に扱う人に悪い人はいない。

これは知ってる。

「千五百ルピーでシタールを探しています。ありませんか？」

実際は絶望的な気持ちで聞いた。アングラーでは一万ルピー以上したから。

ジョーンもスラジもバラナシではすごい安いと言っても信じられる訳ないもんね。10分の1の値段なんて。

でも信じたかったんだ。

それと同時に今回は捨てる旅だとも思っていたので、半分あきらめていた。

それならそれでいいと思っていた。おじさんはちらりとこちらを見た。手は止めない。

じっと待った。

オルガンの掃除が終わった。

アルコールで綺麗に手を拭いて、道具を納めて、言った。

「奥へ来なさい。」

奥には沢山の楽器があった。

全部彼が作っているらしい。外の喧噪が嘘のようにここは静かだ。

奥の方から古いシタールを出してきた。

アングラーで見た一万ルピーと同じ位の大きさのやつ。

彼が試演してくれて。一生懸命。ものすごい下手で（笑）

それでやっぱいい人だという事が分かったんだよね。

「千八百ルピーでどうだ。」

びっくりした。

今までありえない値段。

でも千五百ルピーで買うんだ。

それで余ったお金でウツシーにプレゼントをかうんだ。

状況を説明した。

嘘は言わなかった。

ちゃんと目を見て話した。

彼は言った。

「そう言う事なら仕方ないな。大切に使ってやってくれ」

「god bless you」

また涙が出た。

なんだこりゃ。

泣いてばっかだ。

そして奥の方から古いバックと替え弦も付けてくれた。

彼はチャイイとタバコまでご馳走してくれた。

「そんな顔だから、どうせちゃんと生活してないんだろう？」

ばれてる。

一緒にチャイイを飲んで、2時間くらい、練習した。

途中の休憩、つたない英語で会話をする。

何よりその時間が愛おしかった。

暑さの中、静けさの中、時間は静かに過ぎて行く。

彼の名はソニー。

日本でも有名らしい。

「ここに来てよかったよ。これも他の店なら三千ルピー以上はするよ。それに俺のハンドメイドだ。」

今日も一日歩いたけど、一度もシタールのお店はなかった。
シタールさえ見かけなかった。

本当、

「god bless me」

だよ。

大切なもの

これからガンガーに行くと言った。彼はガンガーに行くのなら朝行きなさい、と言った。
昼と夜は別の顔になるから。

朝がこの街の本当の顔だ、と。

お礼を言って帰る。

帰りはめっちゃくちや迷った。6時間くらい迷った。地理弱いんだよなあ。

夕方が過ぎて夜になり、バラナシは違う顔を見せ始めた。

辺りはまっ暗だ。

ここがどこかもわからない。

雑誌を切り抜いた小さなポロポロの地図は既に意味を成さなくなっている。

同じ所を何度も何度も通り過ぎ、僕の疲労はピークになる。

体が限界になると、頭は動くものに反応して指示を出す。

人と、車の流れに沿って僕は歩き続ける。

途端。

視界が開ける。

ものすごい人と。

ものすごい電飾。

音楽が至る所で鳴っている。

カラフルな人々の色。街の色。

音と色の洪水。

ここがアジアだと実感する瞬間。

僕は全く違う、駅の近くの広場に来ていた。

屋台が至る所に溢れ、人の笑い声が聞こえる。その横ではスリが目を光らせて狙っているし、そのまた横ではカップルがキスしている。

誰も僕の事なんて見ていない。ただ、自分の事に一生懸命に過ごしているように見える。少し小高い端から眺めるこの情景と、真っ暗な川がとても美しかった。

僕はどうやって帰ろうかと思う。

既に歩いて6時間の所にいる。時刻は夜の10時だ。

ホテルのタクシーも呼べた。(お金はないけど)

勿論疲れてもいた。

でも絶対諦めるもんかと思った。

自分で言った事はやり通すんだ。

「迷ったから迎えに来てくれ」

なんて絶対言えない。

これがおそらく僕のトラブルの元なんだろうけど、呼んだら後悔するのは知っていた。

人は迷ったときに楽な方を取ってしまう。

たとえそれが自分の望んだ方向ではないとしても。

その瞬間に、大切なものが音もなく壊れる。

一日の中にもそういう瞬間が沢山あって、それらを見落とすといつの間にか戻れないくらい深い所に落ちてしまう。

気付いたならば必ず心に従う。

僕は明かりを背に歩き始める。

インドの夜は霧が深く、塵が舞う。
霧と暗闇で視界はほぼゼロに近い。

しなだれる木の枝がどこか日本的だと思いながら、たまにでる看板と、そのへんの人に聞いて帰路を急ぐ。

これが見事に当てにならない!!!

行く前から聞いてはいたけれど、本当、めちやくちや言いよる、あいつら(笑)
教えられないのが失礼に当たるから、教えられない位なら、適当に教えてあげる
という訳の分からん礼儀があるとどこかで聞いたな、そういえば。

とにかく僕は霧と闇の中を、一歩一歩押し出して進んだ。

夢の中にいるみたいだ。

迷って迷って迷って迷って。

見つけた。

数千の電飾が僕を迎えてくれた。

明日は結婚式らしい。

とてもきれい。

安心と緩んだ緊張感で体の力が抜けた。

部屋に戻り、シタールを少し弾いて夜と自由を楽しんだ。

夜を、弾いたんだ。

気が付いたら朝がそこに来っていた。

ラブレター フロム インディア

おじいちゃんの背中が反対になって死んでしまう夢を見た。
電話するお金もない。皆にも僕が生きている事だけ知らせたかった。
心配してるだろうな。

ホテルのフロントに頼んで、フロントの電話からも何度も試したが、何故か使用不可。
何故！フロントのおじさんと一緒に電話したのだけれど。

「俺もよう分からんわ。明日にしようや。」
と言われた。

そう。ここはインド時間なのだ。

今日はもんだと会わなくてはならない。

時計台に向かう。足早に、

はい。ジョニーさん迷いましたー。

しかし今日は迷い先でネットカフェを発見。

一件目。

ポルノ専門。えく！！！！聞くと歩いて10分の所にあるという。

二件目。

民家じゃないすか。

どこかにネットカフェありませんかー ありますよー ありがとうございますー

三件目。

ようやく見つけた。

これで連絡とれる！！！！！！

でも駄目。

日本語読めねー

『ッ中近東jk\p \p オw 些々ポ”O”あsjピデオ子で尾pow 『Q w

こんな感じ。

実際はもつと四角とかによるが混じってて精気が萎えた感じでした。

でもなんとか見つけなければ。

時間は刻一刻と迫っている。延びた分だけ今日のバナナの数が減る。
hotmaiの英語のページ。

ようやく見つけたのは keiko(ハートマーク)hikaru@

姉ちゃんやんか。

仕方なく姉に送る。

これもいつのアドレスか知らんが。

二人の愛が冷めてなければ大丈夫だろう。

もしもしたかのりです。

僕は元気になっています。

母さんとウツシーと藤川に僕は元気ですと伝えておいて下さい。

インドは牛が沢山います。

それではまたね

マフィアに捕まったなんて到底言えない。
無事届いていますように。

僕は早々にネットを切り上げて店を出る。
バナナ一本多く買えそうだ。

ガンガーへ向かう。

あの河

歩いて歩いて歩いて歩いて歩いて。

疲れていたけど気は楽だった。

知り合いは僕が無事だと知るだろう。そして、僕は無事で、今は元気にガンガーへ歩いて向かっている。それ以上望む事は何もない。ガンガーにたどり着く事だけ。

考えがシンプルな程、行動はパワフルだ。

本当。

他の事は全く考えなかった。力が湧いてくるのを感じた。

あ、時計台行くの忘れた。

帰ってから連絡してみよう。

無事でありますように。

何人にも道を聞いて、小道を気が遠くなる位ずっとまっすぐ行くと行くと、辺りが静かになった。

と同時に見えた。

ガンガーだ。

圧倒された。

今まで見たどの河より大きく、緩やかだった。

その流れはこのよのものではない程穏やかに、そして力強く対岸を隔てて流れ続ける。いつの間にか出て来た霧がさらにそれを幻想的に見せた。

あの世だ。

どれくらい座っていたかな。

ずっと眺めてた。

全然飽きない。

吸い込まれそう。

日が落ちるにつれ、街は活気を帯び、騒がしくなる。

当然胡散臭い奴も沢山出て来る。そろそろここから離れなければ。何せ僕はここがどこかも分からないし、帰り方すらわからないのだ。(また!)

僕は街を見失わないようにガート(寺)に沿って歩いた。

そして辺りはゆっくりと闇に溶けて行く。

オレンジと紺色のそのコントラストは僕の胸を掴んではくしゃくしゃにしていく。

僕の顔はどんな顔だったろう。

嬉しそうに笑っていたらどうか。

楽しそうに泣いていたらどうか。

カメラもない今、僕を留めるものは何もないけれど。

今日を生きよう

インドの子供達は河原でたこあげとクリケットをしている。

ガートから少し外れている為、河原は砂浜のようになっている。

真っ白なたこが鉛色の空に吸い込まれそう。

ジョーンの家でも思ったけれど、僕らが子供の頃の生活と同じだ。

懐かしい風が吹く。

子供は夕方まで外で遊んで、汚れて帰って来て、風呂に入れられる。

それで夜は家族皆でテーブルを囲んで今日の話をし、少しテレビを見る。

それが何かはわからないけれど。

風はいつも何かを運んで来て、そして過ぎ去って行く。

この光景も風と共に心に焼き付いていく。

暗くなつて来たし、帰りは遠いし、帰り道は分からんし。臭いし、分け分からん奴は寄つて来るし、言葉は通じへんし、おなかはすいたし、喉はかわいたし、頭は痒いし、、、沐浴は明日にしようと思つた。通り過ぎた大きなガートのふもとで、沢山のヒンドウ―教の人が沐浴していた。今日出来る事を明日に延ばすな、って誰かがいつてたな。胸騒ぎ。

明日の朝の方が沐浴するにはロマンチックだけれど、、、

もう感じるままに動けるようになっていた。荷物をおいて、ズボンを脱いで。

沐浴した。

水は思いのほか冷たく、水の中の階段はぬるぬるして足下が滑った。冷たいけれど決して心地悪くはない。むしろ心地よい。川のあたたかさがゆつくりと伝わり始める。大きな力に抱かれている感じ。

これがガンガーか。母なる河。

明日があるなんて誰も分らない。

今日を生きよう。

頭から足まで浸かって、下着で体を拭いて、お寺にお願いした。

音楽家になれますように。

これしかないもん。

小さくて緑色のかわいいもの

12/8 7:51 p.m.

外で結婚式の音楽がなっている。
インドの音楽。
外に出てみよう

12/8 8:06 p.m.

音楽はテープだった。がっかり。
結婚式は9時から。
僕も参加してもいいみたい。
楽しみだ。

12/8 6:30 p.m.

少し前に戻る。
ガンガーの帰り、並ぶ露店の奥になる店があった。
見た目というか、呼ばれている感じ。
一回通り過ぎる。
足が止まる。

直感を信じて好奇心に任せよう。と思った。考えはそうになっていた。
いい兆候だ。店に入ろう。

そこは宝石屋だった。
座敷に上げられる。
指輪にしようと思った。

「おいおやじ。三百ルピーで買える指輪を出してくれ。」
最初は奥から屋台のおもちやみたいなのを持って来た。

「こんなのいらねー!!!」
と言つてすぐに持つて行かせた。

実は最初から決めてた。
緑と白のかわいいの。

いくらかと聞くと、五百三十ルピーだという。

「俺は三百ルピーっていったよね!!!とりあえあず見せて下さい」

一つ石がなかった。彼等は残念そうにケースに戻し、奥に持つて行こうとした。
石が一つでもないと価値は下がるのだ。僕でも知っている。
チャンス。

「あゝ、もしもし?この、これゝ、壊れているやつ? 二百ルピーだったら買ってあげてもいいよ?」

オヤジ 「でも、これゝ、ゝ、壊れてるよ」

「構いません。これがいいんです」

オヤジ 「わかりました。三百五十ルピーで。」

「二百ルピーがいいです」

オヤジ 「三百ルピー!」

「では中間の二百五十ルピーでいかがでしょう」

決定。

最初からこれが欲しかったんだ。

サイズ小さかったらごめんね。

とてもかわいいから。

似合うといいな。

本当に欲しかったものがふたつ。

目の前に現れた。もう何もいらぬ。

無事に帰つてあの子と会いたいな。

街は夜の訪れを待ち望んでいたかのように熱気を帯びて来る。
ギラギラした若者に、鳴り止む事のないクラクションの音。
全て闇が飲み込んで行く。
極彩色の照明や耳をつんざくクラクションは、それを抗う為のささやかな抵抗に思えて来た。

このひとたちはきつと、とても強い。

そう思った。

僕の裾を1 Kmくらい引っ張ってついて来る女の子の物乞い。
何度もごめんねと言ったが全くわかってもらえない。

我慢も限界で僕は財布をみせる。

いいかい！俺も、お金ないの！！！！

ほら！！！！あんたよりすくないだろう！！！！

バーナーナ！！！！わたし、バーナーナ！！！！分かる？

バーナーナ！！！！

ノーマネー ミー バナーナー ヘルプ ミー！！！！

一向に理解してもらえない。

僕は泣きたかった。

目が美しい。

悔しさと不条理で僕の心はもうどうなっているのか分からない。

インドは今日も僕の心をかき乱している。

明日の朝、もう一度ガンガーへ行く。

虫の知らせ

結婚を祝う祭りは朝まで続いた。窓の外には男の子が二人いる。2階なのに！何か密やかに話をしている。僕はそこで眠りに落ちた。

蚊がうるさくて目を覚ます。

目覚ましは午前4時にセットしてあったのにな。

今年前3時59分。まさに虫の知らせ。

急いで服に着替えて外に出る。日はまだ、昇っていない。

よし、と気合いを入れて、ガンガーへ出発する。もちろん一人だ。ガンガーまでは最低一時間かかる。体のあちこちがずきずきと痛む。歩き過ぎだろうな。

辺りの森は、静かに朝の光を待っているようだ。

今日は昨日と同じ。

音楽を持って街へよう。

最初は街の音を聴いて歩いた。

浅暗く、重い朝。空気は澄んでいてとても奇麗に感じる。

夜の喧噪が嘘のよう。

まだ誰も汚していないのだ。

今までさんざん迷ったお陰で、道はすぐ分かった。まっすぐだ。でもね。迷ったんだよね。これが。天然方向音痴ですね。

インドの朝はとても寒い。黒いマフラー（青年が返してくれたもの）を顔に巻く。

コートの襟を立てる。ドイツの国旗はもうついてはいない。（もんだからの忠告で、これが原因で攫われたんじゃないかと言われたから）

誰も僕の事を気にしない。

僕は暗闇を小さな足音で裂きながら道を進む。

少しずつ

しかし確実に

朝に、街に、溶けた気がしたんだ。

真っ赤な太陽

4:20 a.m.

薄暗い道。ガンガーに向かう途中。
花売りのおばちゃんからガンガーに流す花のネックレスを買う。
顔に刻まれている皺が、これまで彼女の過ごした時間を語りかけていた。
10ルピー。

なかった。7ルピーにまけてもらおう。
日本円なら30円を21円にまけて貰った感じ。
ごめんね。今度来たらちゃんと払うから。
この花のネックレスがどうやって僕の元まで届いたのかを少し考えた。
今の僕にはきつと想像も及ばない過程を踏んでここにあるのだろう。
もつとも、花売りのおばちゃんにとっては日常の事なのだろうけれど。
僕はお礼を言つてそれを左手に握りしめる。

今までと全く違った道を通った。(といっても自分で望んだ訳ではないのだが)
もう、北も南も分からん。
皆が教えてくれる道を信じて進んだ。
なだらかな坂を下つて、見えた。

ガンガーだ。

まだ日は昇っていない。
にもかかわらず、沢山の人が沐浴に来ていた。
ポート漕ぎや物乞いの人たちも、まるでお祭りのように道にあふれている。
遠くで歌が聞こえる。

朝日を拝んでから沐浴するか迷ったけど、暗いうちにする事にした。
服を脱いで、パンツだけ。
昨日よりも、もつと、深く。遠い所へ向かう。
昨日のその先、足下は土になっていた。

沢山の人の骨と、血と、涙と。

全てを飲み込んだ水、土、流れ。

頭から浴びて、てっぺんまで浸かって、花を流した。

その時は「皆が幸せでありますように」と願った。

良く分からんけど、そう思った。

体を拭いて、河岸が見える。少し高い所に座って日の出を待っていると、徐々に空が白んで来て、朝の始まりを教えてくれた。

この世のものじゃない風景。あの世があれば、きっとこんな感じなんだろうな。

河はゆつくり、音も立てず流れていて、信者達は目の前で静かに沐浴をしている。

朝の訪れを息をひそめて待っているかのように。

ぼんやり見える河岸と明ける空を見ていると、また涙が出て来た。

止まんなかった。

その美しさと言ったら!!!!!!

鼻から吸い込んだ空気は、僕の体の脳からつま先まで、全て洗い流してくれている感じがした。

日が出た。

真っ赤な太陽だ。本当。

本当に真っ赤だ。

それは僕にマッチの先や、線香花火を思い出させる。

そしてその太陽が昇るにつれて、水面に映る光が僕の元へ!!!

神様が祝福してくれてるんだなあ。

と思った。真っ赤な太陽からまっすぐ、僕の所へガンガンを照らした光が延びている。太陽まで道が延びてるんじゃないかと思う程、くつきりとその道が見えた。

青空

2時間くらい、ガンガーを見ながらぼーっとした。

水面をたゆたう無数の塵の様なもの、太陽の光できらきらと光って、それは夏の海に近いと思った。ゆっくりと腰を上げ、進み始める。行き先はない。挙げ句、たどり着いたのは火葬場。死体の匂いがする。

何故死体の匂いが分かったのかと言われると不思議だけれど、自分が人間だからかもしれない。3人の家族を燃やしていた。

街の喧噪よりも、こつちの方がずっと居心地が良かった。

少なくともここは静かで、荘厳だ。

じっと眺めて、

しやれこうべが割られるのを、見た。

インドは本当に死が隣にある。

道ばたにも普通に死体がある。

それを食べる犬や猿。

誰もその人がどんな人だなんて気にしない。

将来の心配なんてする暇もなく、今日を生きる人々。

将来の心配をして、未来を生きようとする僕ら。

ん。

今日を生きよう。

帰りに通りを歩いてみると、インドの小学生が話しかけてくれた。話が弾んだ。

「you are good man」

と言ってくれた。素直に嬉しかった。僕は

「早く行かないと、僕と一緒にいると皆から何か言われるよ」と思った。

それ位、日本人は周りから注目される。いろんな意味で。

でも もう慣れた。

インドがそれに慣れる事はないだろう。

どんなに僕は頑張っても、国の情勢は変わらない。

こんな沢山の人の意識は変わらない。

だから胸を張って。
僕は僕でいよう。

ホテルに着く前に木陰があったのでそこで休んだ。
ブルーハーツは青空を歌っていた。

空は青かった。

生まれた所や皮膚や目の色で♪
いったいこの僕の何が分かるというのだろうか♪

大切なのは心だ。
歌が終わった。立ち上がって歩いた。
次の歌は僕のとでも好きな歌。

いい奴ばかりじゃないけど♪
悪い奴ばかりでもない♪

本当そう。

選択

12/8 11:15 a.m.

ホテルの人と話をした。やはりツアー料金が法外に高いとの事。

少し危ない気がするから、念のためデリーに着いたらまず日本大使館に言って全部話せばいいと言われた。彼に会う前に。

ジョーンは明日デリーの駅に迎えに来る。

日本大使館までは15 km。それから空港に直接行くのが良いと勧められた。出来る事なら彼等にはもう会うな、と。

最初会ってからジョーン、ずっと俺の持ち金二万円なのに二十万円と勘違いしてたんだよなあ。何度言っても二十万っていつてたもんなあ。

ツアーオフィスに着いてから事実に気が付いたみたいだけど。

お前、それしか持っていないの??? ってびっくりしてたからなあ。

俺が金持つてると思つたのかもなあ。

それとも演技か???

信じたいけど疑う自分に腹が立つ。本当、国が違うと意思の疎通が全く出来ない。摩擦の連続。

それと同時にここはアウェイだ。正直、出来ればジョーンにはもう会いたくない。シタールは確かに破格の値段であったけど、思い返すと胡散臭い所は随所にある。疑いたくはないけれど、会って全てを知りたい。

彼の口から真実を聞きたい。

そこはもしかしたら最初のギャング達と繋がっているかもしれない。

誰にも分からないのだ。

2つ道があつて

安全な道と

危ないけど進みたがつている道。

一度なくした命だ。(大げさか)

最後に本当を見てみたい気もするし、大使館に行つて旅行会社から過剰分の払い戻しを請求したい気もする。

金持ちに大儲けさせるなら、僕はガンジス川の花売り屋さんの花を全部買いたい。本当に苦しんでいる人に、せめてものお金をあげたい。

大使館に行けば、もう危ない目には遭わずにお金を取り戻せて帰国出来る。

ジョーンに会えば真実が分かる。

さあ、ジョニー君

どっちを選ぶんでしょう？？？

答えは明日。

今は分からんわ。

風鈴はちりんと涼しそうに鳴る

ウツシー、凄い事になって来たよ。
今の状況を言えば

ジョニー(プラスホテルの人達) VS マファイア

なんじゃこりゃ。

格好いい！なんて言ってる場合じゃないよ、本当。

ホテルの人が「とりあえず大使館に電話かけてみて、開いてるかどうか聞いてみたら？」

と言ったから明日土曜日やし、とりあえず聞いてみたんだ、大使館に。

明日はお休みです。
マジで！？

その大使館の人は(加藤さん(女性))、大使館からもその旅行会社に電話かけるから、まず僕がかけてクレームを細かく伝えて、相手の出方を伺ってみて、と言った。迷った。

電話をかけたらもうジョーンとは会えない。旅行会社の人が友達らしいから。

全部分かってしまう。
僕が、もしかしたら、、、と思っている事も。

行動の後にはもう後ろはなくて。
僕の選んだ所に道が生まれる。

腹を決めた。

電話しよう。

なるようになる、だよ。加藤さんの言葉も説得力があったし。
安全な道を取るつもりだったのにね。逆になっちゃったな。
もしかしたら全部繋がっているって事だもんね。

ジョーンも、最初のマフィアも。旅行会社も。ババママさえも。

電話屋は歩いて10分の所にある。

何度も通りがかりのインド人の子供達にからかわれながら歩いて向かう。

僕はそれどころじゃないので一路電話屋をめざす。電話屋に並んでいる数人の電話待ちの後、僕の番になる。

薄汚い店の中、埃が光を浴びてキラキラ光っている。

旅行会社に電話して、料金が高すぎると言う事を伝え（あくまで事務的に話した）明日レシートを貰うように言った。

第一段階終了。

大使館に電話する。

加藤さん

「そうですか。そうしたら大使館からも、その会社に電話を一本入れておきます。彼等も大使館がバックにいれば無茶もしないでしょう。」

心強かった。

電話を切った。電話屋のおじさんはのんびりしている。

「どうだ、うまくでんわはあ、つながったかあい。」

店の風鈴がちりんと鳴った。

ホテルに戻ってフロントのおっさん、ムカルジーが僕を呼ぶ。

ム 「良く聞きなよ。分からない事があればもう一度言うからね。とても大事な事だから。」

最初に、デリーの駅に着いたら

駅の警察にいくんだよ。

それから

彼と一緒に

オフィスに行くか

その彼を外に呼び出して

警察に立ち合ってもらいなさい。」

わかったかい？

ゆつくりとしつかりした声で、彼はそれを僕に教えてくれた。いつものおちやらけた様子は無い。

僕もしつかりした文字でゆつくりと紙に書いた。

とても大切な事だ。

大きな国の小さな街で

僕の何かが動き始めた。

ホテル

ホテルのチェックアウトは12時だった。

ムカルジューは、部屋をチェックアウトすれば、荷物はここに置いておいてもいいよ、と言ってくれた。だから色々動けたんだ。

ホテルに戻ったのは13時。

19時の電車にはまだ大分時間はある。チェックアウトした身だけども、もう、ここにいてはいけないのだけれど、聞いてみた。

「2〜3時間シタールを練習させてもらってもいいですか？結局なかなか練習出来る時間がなくて。」

図々しいけど、今から駅に行く気にはなれなかった。多分いろいろと話が進んでいるだろう。ここ、バラナシにも、支店がある。

彼等は僕を捕まえようと思えば、いつでも捕まえる事が出来るのだ。

ムカルジューは笑顔で答えてくれた。

「シタールを練習するのか！？勿論だよ！椅子も要るよね！」

彼はすぐにポーターを呼んで、イスを一脚用意させた。

めちやくちや広い庭。

イングリッschussガーデン。空が青い。

もちろんど真ん中に椅子を持ってって。

弾いた！

デリーに着いたら、もう沢山のギャング達が俺を待っているかもしれない。

バラナシの駅にもいるかもしれない。

僕は袋の中の鼠だ。

デリーのオフィスに入った瞬間、僕はまた最初に逆戻りだ。

僕は一人だ。

そして信じるのは自分だ！！！！

今回二回目。

死を身近に感じた。

もしかしたら死んじやうかもな。

なんか力がでた。

精一杯シタールを弾いて、せめてここにいる人達だけにでも僕が生きている事を知ってほしかった。

ずっと、ずっと弾いた。

止めたらおかしくなりそうだった。

ホテルの皆が声をかけてくれた。

一緒に歌ってくれた。

そして教えてくれた。

一人だけど一人じゃない事。

このシタールが到底千五百ルピーじゃ手に入らない事。

あなたは本当の事を言ってくれたんだね、Mr. ソニー。

感謝した。

最後にゆっくりゆっくり音を確かめて弾いて。

味わって。

これが最後かもしれないから。

後悔しないように。

弾き終えた。

よし、行くか。

ムカルジと話した話によると、このホテルは十数年前に栄えた。今はその広さと豪華さ故に結婚式の貸し切りに寄る収入がメインだ。

後は誰も、この古くてボロいホテルには泊まりたがらない、と。

僕は少し悲しくなった。

ホテルに客は僕しかない。

僕はこのホテルが大好きだ。

DADDY

ロビーに戻るとムカルジーが言った。

「トラベルエージェントから連絡があつて、ここを動くななどの事だそうだ。」

ほら来た。大分慣れた。けど、やっぱりかあ。

心がチクツとした。

大丈夫。絶対乗るかよ！

もう一人のホテルのフロントで副マネージャー、モスジがバタートーストと紅茶を持って来てくれた。

「こんなに払えないよ」

と言うと、

「大丈夫。俺がもつから。食べなよ。」

と言ってくれた。

暖かい紅茶とトーストは、ゆっくりと喉と落ちてお腹にたまつた。食べるのはいいね。

しばらくすると二人組が来た。

迎えた。

J 「絶対いや。歩いて行く。」

二人組 「any problem?」

J 「yes, kind of.... so....」

二人組 「what kind of problem?」

if you have Some problem, we can help you, tell me」

J 「.....」

長い押し問答になる。

問題はお前等だっつーの！と言いかけたけど、今事を荒立てると面倒くさくなると思ふに、適当にごまかそうとするが、しつこく食い下がって来る。

くすんだ目で僕を見つめる。

その目は苛立ちと焦燥を映し出している。相手が渋っていると、それを見兼ねたムカ
ルジがヒンディー語でまくしたててくれた。

お父さんみたいだ。

突然電話が鳴る。

モスジが取る。

「Mr. MASUTANI. JAPANESE EMBACY」

皆の動きが一斉に止まる。

信じられなかったけど。

電話は大使館の加藤さんからだった。

僕には信じる人がいる

電話の声は加藤さんだった。

こちら(大使館側)からはかけられないと言っていたのに。

それに今日彼女は休日だ、確か。

本当に嬉しかった。

僕にはもう、電話するお金は残っていなかったから。

その上、旅行会社で安心してレシートを貰わなかった僕の為に(大失態)金額を全部確かめ
てくれていた。

「いい？最初から言うからね。全部書き留めて、明日の交渉に使ってね。きちんと用意しな
いとうまく丸め込まれるから。只、無理はしないように。」

旅行会社は急に大使館から電話がかかってきてびびくりしたんだろうな。

出鱈目ばつかで少なくとも四千五百ルピー(一万円くらい)はミスを確認したとの事。

しかもジョーンに借りたお金は請求書の何処にも記載されていないとの事。

やっぱりなあ。ちよつと落ちた。

「彼と警察と一緒にいこうと思います。」

と言ったら、

「それはいい考えね」

と言ってくれた。

旅行会社から今、迎えが来ている事も伝えると、

「まだそいつらうろろうろしてんの？相手も日本大使館を相手にする程の勇氣はないわよ。

明日、がんばってね。」

と言ってくれた。声がとても優しく力強かった。

お礼と、無事終わったら連絡を入れる約束をして、電話を切った。

結果的に国際機関まで巻き込んだのかな。

皆すいません。

そしてありがとう。

さっ。

振り返ると、二人組の姿は消えていた。ムカルジーが、何やら電話で誰かと話して急いで帰って行ったよ、と教えてくれた。

モスジは心配してくれて、ホテルの誰かが必ず駅まで一緒に行くから、と言ってくれた。

「that's our duty」

「それと、駅とか電車の中で、誰かに何か勧められても、絶対貰っちゃ駄目だよ。君の好きな、バナナとビスケットを買って行きなよ(笑)」

OK。そうしよう。

その言葉の真意は分からなかつたけれど。きつとそれがベストの選択なんだろう。

僕には信じる人がいる。

夕日が落ちるこの街で

残りのお金でバナナとビスケットを買いに行った。

だってこれしか買えないんだもん。

また迷いましたよ、ええ。街に標識なんてないし、あってもヒンディー語で書いてあるから分からないんです。

まあ、いい訳ですね。はい。

方向音痴Ⅱ天性の記憶力＋好奇心＋適当さ

で表されると思います。

ギリギリ6時。あぶねー。

戻るとムカルジューは帰っていた。

ありがとうと行って抱きしめたかったのにな。

モスジが、奥の部屋でオーナーが呼んでいるよ、と伝えてくれたので、奥のオーナー室に行く。

オーナー（40代で背が高く実業家の出で立ちだ）はとても親切で、電話で列車にチケットの確認をしてくれて、その上、後で駅まで送って行くよ、と言ってくれた。

なんでこんなにやさしいんだらうな。

また信じちやうじゃないか。

モスジとホテルの皆に何度も何度もお礼を言って無事デリーに着いたらと、日本に着いたらの二回、連絡をする事を約束した。

モスジは僕の事を強く抱きしめてくれた。

人は温かいんだな。そんなひとたちのなかでは、僕は子供になる。

それでもいいよね。

ムカルジューもモスジも、三人とも同じ事を言ってくれた。

君が困っている時は、俺等が君を助ける。もし日本で僕らが困っていたら君は助けてくれるだらう？

君を見れば分かるよ。

god bless you

祈りの仕草を込めて。

いつか必ず遊びに戻ってくる事。大使館にここのホテルは大丈夫だという事（でないと色々迷惑がかかるのだ）。
それと、何かプレゼントを日本から送る、という事を付け加えた。
「そんなものいらないから、大使館だけ頼むよ、マジで」（笑）
と言いながらモスジは携帯の番号まで教えてくれた。ひょうきん者だ。
「駅でボスに何か買ってもらいなよー。」
と言った後、

you are guest

and we are host

that's our duty

と言った。

嬉しかった。

お金もない、何のメリットもない、逆に迷惑ばかりの客だったのに。
こんなにも優しくしてくれてさ。

いい奴ばかりじゃないけど

悪い奴ばかりでもない

だよ。

その後、オーナーのバイクで駅まで行ったんだ。
バイクからの流れる景色は、リクシャーよりも、乗せられたどの車よりも速く街に溶けて、風と街が僕を受け入れてくれた気がした。
そんな甘い風が吹いていた。

熱くて、からつとしていて。

夕日が落ちる、そんな一日の。

甘い風だと思った。

地獄列車 (前編)

バナナシの駅はあらゆる人達でごった返している。
泣いている子供、物乞いの老婆、威勢のいい兄ちゃん。
難民キャンプみたいだ。

オーナーは心配だから、と駅の中までついて来てくれて、食べ物から何から全部用意してくれた。僕がバナナを買おうとすると、

「大丈夫だよ。お金ないんだろう？そのお金は何かの為に取っておきなさい。」
と言ってくれた。

忙しくてなかなか彼女に会えないと嘆いていた。どこの国も一緒か。

ヒンディー語が理解出来ない僕を心配してくれて、列車の中まで一緒に入り、僕の席を見つけて微笑んでくれた。

そして、もう一度

「god bless you」

と身振りもつけて言ってくれた。僕は

「have a merry christmas」

と返したんだ。

そして今、一つの安そうなベットが二人掛けになっていて、この半分のスペースに僕は荷物とともに12時間過ごす。シタールのお陰で僕のスペースはさらにその半分になる。そして、オーナーに言われた通り、僕の荷物はチェーンでぐるぐる巻きになっている。これでもかって位、ぐるぐる巻きだ。窓は鉄格子だ。囚人みたい。

大人も子供も、おじいさんもおばあさんも。

皆同じ状況。外国のおじいちゃんやおばあちゃんは強いよなあ。

物売りや、物乞い、音楽家や不良少年達が通路を行き交っている。

隣には本を読んでいる知的そうな少年がいる。

一度だけ、トイレに行く為に話をした。

僕は君がいい奴だと思う。

トイレに行く少しの間だけ、この荷物を見ていてくれないか。

そう言って、一度だけ荷物を離した。

指輪はポケットの中。

戻ると荷物は石のように元の場所から動いていなかった。
当たり前前の事なんだけど、とても嬉しかった。

お礼を言って、また僕は他人に戻った。
この状況で、誰かに気を許すのはとても危険な事だと思う。
たとえ、目の前の彼がいい奴だとしても。

それは向こうも同じだろう。暗黙の了解になっているみたいだ。

ベットは全席二段ベットになっていて、右上の男の子がさつきからちらちらと、ずっとこっちを見ている。
気をつけなきゃな。

今夜は眠れない。

あと12時間。

シタールと指輪だけは、絶対に守るんだ。

自分を守れるのは自分だけだ。

寝てたまるかよ。

地獄列車（後編）

出発前にたいぞうに借りた、いとうせいこうの「LOVE論」を読んでいた。くだらんわー（笑）でも好き、こういうの。今回は、岡本太郎といとうせいこう、横尾忠則の三本立てで来た。

外国に行くと、急に日本の活字が恋しくなる。不思議だな。

気分転換にその鉄格子を開けた。

何千のオレンジのライトが川を照らしていた。

すごい。

それは僕に子供の頃に連れてってもらった蛍を思い出させる。列車が揺れるから、その光も振動に合わせて踊る。

その光景はノスタルジー以外の何物でもない。

昔の思い出。そして、今がいつかは思い出になるんだろうな。

真っ暗になってしまった辺りは、もう街の影はない。そこにはひたすら田舎の風景が続くだけだ。

荒れたトタンの街には沢山の落書きがあり、それを僕はとても美しいと思った。

夜風に触れていよう。

時間はいくらでもあるんだ。

沢山の街の夜が目の中を通り過ぎる。

こうやって”今”は、僕の体の中に入って行くんだと思った。

気持ちいいな。

9:49 p.m.

目の前でおっさんが櫛で髪をといっている。

髪は殆どない。

そういえば、須藤君と見に行った、シユバンクマイエルのルナシーもこんな感じだったなあ。どこに行っても嘘ばっか、みたいなの。

絶望の手のひらで必死にあがく感じ。でも本人は周りの嘘には気付かずに、必死で活路を探すの。

俺はハッピーエンドで終わるもんね。

そういえば、髪がキシキシだ。ずっと石鹸かガンガーで洗ってるもんな。帰っても、まあ、洗おうか。

人は人それぞれ固執する所が違うのだ。僕は別にそこまで洗髪に執着はない。だってもつと大切な事がたくさんあるんだもん。

11:22 p.m.

どうなってるんだ、インド!!! 戦時中じゃないか、これ!!!
電車の中は絶えず自衛隊が銃を持って歩いている。
赤子はわんわん泣いている。

男達は先々で喧嘩している。僕を見て笑っている。

日本のバスは夜9時消灯ですよ!!!

寝て下さ〜い!

自衛官の見回り。

訝しそうな目で僕を眺める。

チェーンは必ずかけて、小さいバックは絶対に手元を離すな、との事。
大丈夫。寝ないから。

12/9 6:49 a.m.

まあ、少しうとつとしたんですけれども。

殆ど眠れず。

なめてた。

ていうか誰か言ってくれ、この無防備な僕に!!!

マイナス10度はあるよ、これ。超寒い。何なのこれ!!!!

窓、だって鉄格子やんか! 風全部入って来てるやんか!!!!

お年寄りを考えろ!!! ていうか俺の事も考えろ!!!!

毛布も掛ける物もない僕は、持ち物全部ばらして、体にぐるぐる巻きに付け、マフラ
ーとかばんのふたを頭に巻いて、暖をとる為にシタールとバックを抱えて朝を待った。

何も考えられない。

只、がたがたと震えながら、ここで凍って死ぬんじゃないかと思いつつながら、永遠とも
思える時間、僕はそこで朝を待った。

音楽を聴いて。

今までもずっとそうだったけど再確認。

音楽が、僕を助けてくれる、と思う。

困った時、落ち込んだ時、嬉しかった時。

いつもそばにいてくれた。
一番の友達。
ずっと一人だったからさ。
これからも大切にしなきゃ。

どんな夜にも朝が来るのだ。
かじかんだ手は朝の風に少しづつ溶かされ
頬は朝の光にキスされたみたいに、次第に赤みがさして来る。

僕は新しい朝の喜びを知る。

警察はいっだって駄目さ

デリーに着いた。

朝は早い、駅にいるはずの迎えを撒く為に、二つ前の車両から出る。
ここで見つかってしまったら最初に逆戻りだ。
慎重に行動しなきゃ。

誰にも気付かれないうちにこっそりと駅を出て、警察を捜す。

警察に立ち会ってもらってツアー代の清算をする為だ。
デリーの駅前には観光客と物乞いでごった返している。その光景は僕にカルティエブレソンのサンラザールの写真を彷彿させた。
水たまりに映る人が美しいと思った。

警察を発見して、事情を説明しても、偉そうな態度で全く取り合ってもらえない。
逆にお前どこから来たんだ、とパスポートや航空券を見せろと言いついて来る始末。
肩にかけて銃がやけに高圧的で鼻につく。
もういいや。

どこでもそうだよな。
警察は当てにならない。

仕方ない。一人で乗り込もう。

迷いながら市街地へ向かい、最初の旅行会社を探す。コンノートプレイス（デリーの中心にある四角形のロータリーでカフェやお洒落な店が建ち並んでいる）を何度廻ってもなかなか見つからず。途中ででかい犬が吠えて向かって来たのでびびった。威嚇したら後ろからもう一匹、黒いのが出て来てさらにびびった。さすがに二匹は無理やわ。

三度目の威嚇でようやく向こうに行ってくれた。

でかいシタール持った汚い日本人が犬、威嚇してんの。

周りには滑稽に映っただろうなあ。だって狂犬病とか嫌やもん！

そしてまたコンノートプレイスをぐるぐると歩き廻る。旅行会社が見つかる気配は無い。

「ジョニー！！！！」

突然僕を呼ぶ声がする。

甲高い声。

忘れもしない。

それはジョーンだった。

シンボル

その声はジョーンだった。
まいったなあ、と思った。
最悪の展開だ。

せっかく追っ手を撒いたと思つたのに。全員グルだったらどうしよう。というか、全部繋がってるよな、多分。

彼は大きなアクションで僕を抱きしめて再会を喜んでくれる。僕は少し戸惑って、どんな顔で笑えばいいのか分からない。

そのままトラベルオフィスに連れていかれる。正確に言うと、その流れになる。ジョーンがいなくても、結局僕はトラベルオフィスに行かなくてはならなかったから。交渉のため。

警察はついて来てくれなかったし、代わりにジョーンがついてきたけど。ここで後戻りしちゃ駄目だ。真実を確かめる為にきたんだろ？

今僕がここにいるのは僕と彼等しか知らない。万が一僕がここから消えても、誰も何も分からないのだ。国だって、警察だって、こんな広い国では分かりっこないのだ。彼等は”僕”をこの世の中から消す事が出来る。

そう思うと覚悟を決めたはずの僕の胸は、高鳴った。

オフィスには四人。

ジョーンと、店のオーナーという男と、チケットを発券した奴と、僕。

明細書を確認し、明らかにおかしい所を何カ所も訂正した。

アーグラでチェックアウトが遅れたので二万円プラス、とか。

朝スラジが呼びに来て予定通りチェックアウトしたのに！？

手数料が以上に高かったり、とにかくめっちゃくちゃだった。

加藤さんに教えてもらったメモは昨日列車の中で覚えていたから、言いたい事は殆ど言えた。でも、本当におかしい所が一杯あった。

何か言うとか何か言い訳で返してくるので、途中でばかばかしくなってきた。

最後はある程度の金額を返金してもらおう所で話を切り上げた。

内容は分かったし、話しても通じない事もある。

無事に帰れる事が今は大切。

そう思った。

ジョーンは横で僕の友人として話し合いに参加した。

そして最後までいい奴を通した。

他の仲間も来なければ、待ち伏せもなかった（かどうかはわからないが）

話し合いが終わって、時間もあるし、お茶でもどうか、と誘うジョーンに、僕は空港へ行く、と断る。

空港へ向かいかけた。

空港は”あがり”だ。

僕は何て言うのか、無事に”あがり”たかったのだ。冒険心とか、挑戦とか、今はもういいと思った。無事に帰れる事が一番だった。

足早に空港に向かう僕に、ジョーンはオートリクシャーを呼んで値段交渉をし、ちゃんと送り届けるように何度も言ってくれた。

最後に抱きしめてくれたけれど、僕は何も感じる事が出来なかった。

でも、本当に政府のオフィサーだったら、今日もこの前も働いているはずだよな。ジョーンが最初の日、旅行の足りない代金をカードで支払ってくれた事も、旅行会社のオーナーは一言も言わなかった。

むしろ、当初の値段からスタートして、大使館からプレッシャーはかけられるわ、訳の分からん日本人は文句言いにくるわ。

「もう二度と日本人とは取引しない。こりごりだ！」
と言って怒っていた。

もう、何が何だか、ねえ（笑）

オートリクシャーは僕を乗せて空港へ向かった。

15分で空港へ着くはずなのに、30分かけてデリーの街へ戻って来た。
えく！！！！！！

何度も地図を開いては指先確認している。

初陣デスカ、お兄さん！！！！

ありえんって、本当。

持ってた地図を（僕のボロボロの地図の方がまだ分かりやすい）貸してあげて再出発。

おかげでデリーの街がゆっくり見れた。

でもやっぱ。

バラナシが良かったな。

バラナシは本当、素敵な街だった。

少しずつデリーの街が遠ざかって行く。

今度は多分、本当に。

神様はやっぱ、ちゃんと分かってんだなあ

空港に着いた。

チェックインするつもりだったが、四時間前からしか出来ず、中にも入れず、ろくな設備のない町外れのラウンジでこれを書いている。

今は午前8時30分

あと6時間。もここにいんのかあ（苦笑）

ホテルに電話する。

ムカルジーはいつもの陽気な声で、良かったなあ、と喜んでくれた。

彼の本当に良かったなあ、って気持ち電話越しに分かった。

僕はまた涙ぐんだ。こんな嬉しい事なんてない。

日本に着いたら連絡を入れる約束をして電話を切る。

手持ち無沙汰なので一つだけある土産屋に入る事にした。

交渉で三千ルピーもお金を手に入れた僕は、大船に乗ったつもりで意気揚々。

取り戻したお金は大使館に送って、食べる物にも精一杯な人達、今回の旅で僕が自分に精一杯で何も出来なかった人達の為に使ってもらおうと決めていた。

でもお金を持っていると、買いたくなるのが人情でしょう？

日本に帰って一万円送ろうかな、と思う。心配してくれる皆に、何かお土産を買いたいのだ。土産屋を見回して、品定めをして、ある事に気が付いた。

今の僕の視点はインドの人の視点だ、多分。

なんとか食べて生きている人の視点だった。

四日間を三百ルピーで過ごした僕は1つ三百五十ルピーのキーホルダーや、五百ルピーの服を見て戸惑う。店に入った観光客はバンバン買っている。

そうだよな。

そりゃ反感も買うし、物乞いの人達も着いてまわるよな。

と同時に千五百ルピーでシタールを売ってくれたMr.ソニーにもう一度感謝した。

切羽詰まった手で手に入れる事の出来た僕のシタールと、ウツシーのプレゼントがとても愛おしく思えたんだ。

その指輪より高い物なんて今は買いたくない。

ごめん、みんな。

決めた。

空港の中に入ったら、封筒を買って日本大使館の加藤さんにお金を送ろう。
(旅行会社の事が終わって電話したら番号間違えていたから心配してるだろうな。
成田から新宿に行くお金だけ残して、あとは全部。)

当初の予定とは変わってしまったけれど、この旅になって良かったな。

神様はやっぱ、ちゃんとわかってんだなあ。

今年のインドのスローガンは Incredible India
ん、まさに!!!!

では今回の旅日記はこのへんで。

窓の外では牛が寝ていて、その横でおっさんがドリルで穴を掘ってるわ。

エピソード

空港の中は例の如くごった返していた。

僕はまず適当な便箋を見つけ、加藤さんに手紙を書いた。

そしてその旨を記した手紙と一緒に、残りのお金を全部封筒に入れて簡易郵便局から大使館宛に出した。

無事届いているといいなあ。

次にシタールの梱包場に行く。

おっさんが言う。

「シングル？ダブル？」

「え？え？え？」

「シングル？ダブル？」

聞くとシタールを梱包する為に、1重か2重かのオプションがあるらしい。値段は勿論2重が2倍らしい。

手元にはサララップらしきものがある。

「1重でお願いします。」

おっさんは手際よく一度だけサララップを巻く。

そしてにかつと笑った。

大金を旅行会社から手に入れた僕は、何を食べようかと思っただが、何故かビスケットを買ってしまった。

結局飛行機まではビスケットだけ。なんでだろうね。

ビスケット食べながら機内食食べたいなあって思ってたの。

だから飛行機で食べた機内食はこの世のものでは無い位美味しかった。凄くおいしくておかわりしたかったけど、恥ずかしくて言えず、次のご飯の時間が待ち遠しくて仕方なかった。

ご飯を食べた僕は死んだように眠った。

身を脅かされない飛行機は、暖かい毛布だった。

時折揺れる振動はゆりかごのように優しかった。

安心して眠る僕は、赤ちゃんに戻っていたと思う。

日本に戻り、僕は成田からウツシーの働いている新宿へ向かう。
突然現れた汚い僕に彼女は驚く。
でも僕の顔は、生きている誇りで満ち溢れていたと思う。

「ただいま」

彼女の顔が輝く。

それが全てだ。

最後に、連れて行かれそうになったヒマラヤは今、マイナス20度だったという事を追記しておく。
涼しいなんてもんじゃないねえ。
ハイジのヤギとミルクを想像していたのだけれど。

いつ死ぬかなんて分かんないから。

今日を生きよう。

そしてどこかで迷ったら

心にちよつと聞いてみる。

あとは体にまかすだけ。

きつとそうだ。

簡単な事さ。

こうして僕はインドで生き延びたんだ。

この文章を三年前の弱くて強い「僕」に捧げる

おわりに

三年振りに手元にこの日記が戻って来た。

読み返してみると、荒々しい文字で書かれている文章から三年前の「僕」が感じた事が生き生きと感じられた。

今の「僕」は三年前の「僕」を形にしてあげたいと思った。

そして、今の僕はそれを確かめたいと思った。

だから、これは「僕」が「僕」に書いた手紙みたいなものだと思う。

自分の人生の中で、退いや行けないときが何度もある。

どんな小さな事だって、凄く大変な事だって。

それを流されちゃうと、どんどん流されちゃうんだよね。

逆にそれを退かずにどんどん進んで行くと、きっと素晴らしいものが見えて来る。少なくとも自分に正直になっているから。

僕にとって大きな転機は捕まって逃げ出した時。

勿論怖かったけれど。

それで僕は覚悟の怖さと大切さを学んで。

今でもやっぱり運命の偶然には驚かされっぱなしだ。

だけど自分で歩いて行く大切さを知った。

今でも弱い僕だけど。三年前の弱くて強い「僕」を思うと勇気が湧いて来る。

だから僕は三年前の「僕」に恥ずかしくないように毎日を生きて行きたい。そう思っ
てこれを今、文字にしました。

全部読んでくれた人、どうもありがとう。

読んだ前と後では何かが変わっているかもしれないし、変わらないかもしれない。
そんなもんだ。

でも気をつけて周りをみてごらん。

きっと何かが変わっているから。

あなたの素晴らしい発見と素敵な大冒険を願って

